公事根源集釋

上

十八公圖表

73
6781
1

門ヲ3
號6781
卷 1

公事根源月録

正月

一 四方澤　一日
二 供御藥　同日
一 供御節供　同日
四 朝賀
五 小朝澤　同日
六 元日節會　同日
七 内侍所御供
八 供若水　立春日
九 供若菜　上子日
十 子日遊
十一 御杖　上卯日
十二 二宮大饗　二日
十三 朝覲行幸　同日
西 陪膳客　同日
十四 視告朔　三月
十六 御國忌　四日

昭和九年四月五日寫了
故三上於菟吉先生
三上參次氏贈

叙位　五日
十九 御齋會　八日
二十 白馬節會
二十一 太元帥法　四日
二十二 真言院御修法　同日
二十三 給女王祿　同日
二十四 縣召除目　十一日
二十五 御齋會四論義　十五日
二十六 獻御粥
二十七 御薪　同日
二十八 踏哥節會　十六日
二十九 射禮　十七日
三十 賭弓
三十一 仁壽殿觀音供　同月
三十二 内宴　二十一日
三十三 國忌　二十五日
三十四 神祇官獻御贖物
三十五 外記改始
三十六 春書奏　三十日

三十七 七瀬御祓
三十八 火炎御祭
三十九 弋厄御祭　二月
四十 釋奠　上丁日
四十一 春日祭　上申日
四十二 卒川祭　上酉日
四十三 園并韓神祭　上丑日
四十四 大原野祭　上卯日
四十五 祈年祭　四日
四十六 列見　十一日
四十七 小豆御忌　十五日
四十八 祈年穀奉幣　廿二社二月七月二度吉日奉之
四十九 源侍仁王會
五十 位祿定
五十一 季御讀經

五十二 御燈 三日
五十三 曲水宴 同日
五十四 藥師寺最勝會 七日
五十五 石清水臨時祭 中午日
五十六 鎮花祭
五十七 京官除目
五十八 東大寺授戒

四月

五十九 告朔 齋院御禊 一日
六十 孟夏旬 同日
六十一 更衣
六十二 大神祭 上卯日
六十三 貢氷 同日
六十四 山科祭 上巳日
六十五 稲荷祭 同日
六十六 松尾祭 同日
六十七 平野祭 上申日
六十八 當麻祭 同日
六十九 杜本祭 同日
七十 梅宮祭 同日
七十一 當宗祭 上酉日
七十二 擬階奏 七日
七十三 廣瀨龍田祭 四日
七十四 伊勢神宮祭 十四日
七十五 灌佛 八日
七十六 賀茂國祭 同日
七十七 日吉祭 中申日
七十八 賀茂祭 中酉日
七十九 關白賀茂詣 同日
八十 吉田祭 中子日
八十一 中山祭 同日
八十二 新日吉祭 三十日
八十三 駒牽 廿八日
八十四 三枝祭

五月

八十五 獻菖蒲 三日
八十五 五月節會

八十六 端午節
八十八 紫野今宮祭 九日
九十 宿勝講
九十二 著鈦改

六月

九十三 御贖物
九十五 供醴酒 同日
九十七 御體御卜 十日
九十九 神今食 同日
百一 祇園御霊會 十四日

八十七 左右近馬場騎射
八十九 有無日 廿五日
九十一 賑給

九十四 供忌火御飯 同日
九十六 延暦寺六月會 四日
九十八 月次祭 十一日
百 供解齋御粥 十二日
百二 祇園御霊會 十五日

節折 三十日
百五 鎮火祭 同日
百七 施米

七月

百九 廣瀬龍田祭 四日
百十一 乞巧奠 七日
百十三 盂蘭盆 十四日
百十五 祈年穀奉幣

八月

百十七 八朔風俗

百四 大祓
百六 道饗祭 同日
百八 雷鳴陣 同日
百十 七日御節供
百十二 文殊會 八日
百十四 相撲
百十六 位重會
百十八 釋奠 上丁日

百十九 小野祭 四日
百廿一 石清水放生會 十五日
百廿三 季御讀經
百廿四 御燈 三日
百廿六 重陽宴 九日
百廿八 撰虫

九月

百廿八 旬 朔日
百三十一 射場始 五日

十月

百廿八 定考 十一日
百廿二 駒牽 十六日 駒牽外、近代皆選爲由也
百廿五 不堪田奏 七日
百廿七 例幣 十一日
百三十 豕子餅 上亥日
百三十二 殘菊宴 五日
百三十四 維摩會 十日
百三十六 祀雪見參
百三十八 供忌火御飯 一日
百四十 朔旦冬至 同日
百四十二 宗像祭 上申日
百四十四 平野祭 同日
百四十六 杜牟祭 上酉日
百四十八 卒川祭 同日
百五十 當宗祭
百三十五 興福寺法華會 六日
百三十七 大粮申文

十一月

百三十七 御贖物 一日
百三十九 御鷹奏
百四十一 相嘗祭 上卯日
百四十三 山科祭 上巳日
百四十五 春日祭 同日
百四十七 當麻祭 同日
百四十九 梅宮祭 同日

百五十一 中山祭 同日
百五十二 松尾祭 同日
百五十三 大原野祭 中子日
百五十四 園并韓神祭 中丑日
百五十五 五郎 同日 丑日二度時八上丑用或下丑日用也
百五十六 鎮魂祭 中寅日
百五十七 新嘗會 中卯日
百五十八 豐明節會 中辰日
百五十九 吉田祭 中申日
百六十 日吉祭 同日
百六十一 日吉源時祭 同日
百六十二 賀茂源時祭 下酉日

十二月

百六十三 供三宮御飯 一日
百六十四 大神祭 上卯日
百六十五 國忌 三日
百六十六 御禮御卜奏 十日
百六十七 月次祭并今食 十日
百六十八 御佛名 十九日
百六十九 御髮上 下午日
百七十 立土牛童子像 大寒日
百七十一 荷葉 撰吉日
百七十二 着鍬改
百七十三 內侍所御神樂
百七十四 御贖物 三十日
百七十五 大祓 同日
百七十六 追儺 三十日

公事根源目錄畢

公事根源八一條禪閤兼良公二十一歲時撰ゼラル奥書云應永二十九年正月十二日書之畢　偏爲賢兒也小見有憚　内大臣　又一本奥書云右根源抄依柳營御所望後成恩寺關白兼良公二十時生年十九歲不被見一紙之書被書進之　此柳營者足利四代長得院義量也　古筆屏風傳云兼良公一条太政大臣從一位關白准三宮號後成恩寺也經嗣公息博聞强記無書而不讀讀無不通故倭漢之學識不愧古人自負才氣無歌學之師承將讀古今集慨然嘆曰關之市必立之平一卷之書必立之師況歌道之奥乎竟擘就冷泉持爲卿學三代集之祕訣乃賜手書曰自今而可爲當家之羽翼云云其手書至今存家凡所著四書童子訓日本紀纂疏元亨釋書註文明一統記歌林良材花鳥餘情源氏祕訣源氏年立源氏和字抄古今祕抄新式今案追加重編職原抄令抄江次第註讓位即位御禊大嘗會和字抄公事根源抄除官雜例愚見抄連珠合璧東齋隨筆樵談治要關藤川記雲居春筆之慰尺素往來世諺問答等此外雜著不可縷舉今記大綱而已

公事　○論語雍也篇云非公事未嘗至於偃之室也集註公事如飲射讀法之類

根源　○韓文潢潦無根源

屬星ヲ唱　○江家次第云皇上於拜屬星座端笏北向稱御屬星名字七遍是北斗七星也子年貪狼星字司命神子　丑亥巨門星字貞文子寅戌祿存星字祿會子卯酉文曲星字微惠子辰申廉貞星字衛不隣子　巳未武曲星字賓大惠子　午年破軍星字持大景子

山陵　事延喜式諸陵寮式見ヱ又本書荷前所參考スヘシ

實祚　○卓氏藻林二寶

公事根源

正月

一日

一　四方拜

四方拜といふ事は元正寅の時小皇屬星を唱へ天地四方山陵を拜し年災を祓ひ寶祚を祈り儀

○江次第云於清涼殿東庭先敷葉薦其上敷長筵東北妻

清涼殿の東階の東の方に御屏風を立て其中に御座三所を

其上立御屏風八帖大宋或四帖云云不可然往年月令之御屏風也近代無之

○江談抄第二云諸屏風等有其數所謂漢書打毬坤元錄變相圖賢聖山水等御屏風等之類是也隨時立之委事見裝束司記文歟

拜天地之座在東一所拜屬星座在西一所　○江次第後醍醐年中行事御座皆兩面短疊也

祚帝位也。臣軌序云
長壓實祚注易曰聖人
之大寶曰位
砌 ○字彙階甃
南淵 大和國ノ多武峰
近所也
天地瑞祥志 ○天地瑞
祥志第十云師曠曰正
月朔旦四方終日之間
有雲五穀成熟無雲爲
飢也有青雲氣大熟有
疾疫赤雲氣大旱不熟
白雲氣小熟人民小不
安黑雲氣小熟多水人
民小厄黃雲氣歲大熟
人民安樂蒼白雲爲小
水若小疾蒼赤爲小旱
若小疾蒼黃爲小吉有
土霧人民疾病也

まうけ其帝ノ位ニ本の机に置て書籍
燈なとを七ケ所に取りて御祚乃儀式
ありむ殿ノ内に行なと巳四方祚
といふけるしやを行い内裏仙洞摂関大臣家
なとの御いさ事となし此此事いみ始
まるともみなに和人年正月寅ノ刻より天
地四方厚畢山陵をあ行御宮多の御門
寛五 御記事也
ノ御記ノ内に行なとも遷鶴といふなり
文選江賦惟岷山之導寸江初發源於盈觴註觴酒酸也言發源小酸
はまり畢極天皇雨を祈なとて南淵乃河
三十六代
ホリ
よりの幸有て四方を祚行られい事

至氣方色不名當色也
○月令廣義卷之三生
氣方 正子二六丑順
輪十二月亥
○江次第云陪膳女房
調埦飯居臺盤大盛二
十坏飯二十坏大折櫃
交菓子二合給諸司女
官並六衛府大破子十三
荷小折櫃交此外稱腋
菓子三十合御膳自御厨子所供御
齒固具又供御藥酒等
以高坏六本献之有餅
鏡用近江
火切

まて浴多れ日本紀よの始り拔まて
はをなとをもしへらん
共に屠畢祚行て災難をのそく為
天地瑞祥志といふ書ふなり

同日

二 供御藥

是い元三乃祝ノ御殿ノ内に御こなりるま
に書御座小御なりて生氣乃文ノ御
衣をとり祚行ノ御ノ様ノ
めるれ陪膳ノ典侍典藥以も生氣乃ノ文
玉髮卷河海抄齒固事江次第抄云齒謂人年齡也齒固者延年固齡之義也
是に御ノ厨子所乃御齒固を行なと
齒固事河海抄詳也

公事根原上

屠蘇 ○聞書巻之三十八風俗志屠蘇酒華陀與魏武帝方也○四時纂要曰屠蘇恩邈菴名屠絶鬼氣蘇醒人魂

小兒ヨリ ○四民月令云正旦進酒次第當從小起以年少者起先晉海西令問董勛曰俗人正日飲酒先飲小者何也勛曰俗云小者得歲先酒賀之老者失歲故後飲酒

鬼間 清涼殿ヨリ

禁秘抄云二間格子也南間常不上有覆簾巻之其内南北行立御厨子置御膳具

古今著聞集第十一云

鬼間壁白澤王ヲカク

事ハ昔彼間ニ鬼ノスミケルヲ鎖シコケル故ニカヽレタル事ト八申ツメタレトモタシカニ説アレヽ

東戸向テ飲 ○千金方云於東向戸中飲之

後取 ○名目抄云後取元三御藥除夜藏人定其人元日四位二日五位三日六位

交名切紙 ○江次第云

後取		廣一寸八分高一寸六分
元日		元日四位
二日	其朝臣	二日五位
三日	其	三日六位

並用高戸者近代不必然

令婦 為人役遣ハ令婦ハ小令婦ハ

藥子 藥子トハ小女ノイヒ也

を乾 乾ハ用事ヲ屠蘇小兒

りれむ 奉文ハ其ハ小女

を撰 撰ハ用ヲスヽ

鬼の間 女官典藥ヲメシテ御藥ヲモ

ふさ 女官分御酒令草藥子

ほと 一献小先屠蘇酒小ヘ藥ヲ

のま 次小銀器ヨリ典藥頭ヨリテモ

いぜん 以前ヲ屠蘇ヲ

御殿の南の戸より入給ひ御ありこれ

東のつの戸ひらき給へ陸膳

御膳供 [外次第云次女官移入御酒盞餘分御銚子餘分等於大土器傳給於後取人其人飲畢女官取其杯畢]

小向 本文ニハ小女官ハ

しるい 江次第云○餘分序錄巻之四十九云人能飲不能飲有大小戸之稱唐宋酒令詩話云雖多矣今人殆相循而云爾或問此稱定起何時只云孫盛

ど戸 戸ハ高戸トアリ唐三ハ大戸云

酒 酒ハ取ハ

四位一日 一日ハ位ハ二日ハ位ハ三日ハ位ハ

饗宴人以七升為限小戸雖不入白五斗蘭藏取盡是二國俗前事歟蘇者之有此旨也

月奉 月奉ハ

て殿上 北壁角柱西第三間柱也

神の白散 二献之間

を供 供ハ

大根ヲタク　○江次第云多給大根正月人多精進之故歟或給串刺裏書女藏人居扇上賜之後取

度嶂散　○延喜式注度嶂散辟嶂山惡氣

御タウヤク　御膏藥ト書カウ藥ノ名ヲ忌テ多藥ト号也千癒膏ト云カヤウ也。江次第云主上取之以右手無名指ノ末塗於左掌給曲右第四指是藥師印相也乃用之裏書後醍醐院抄傳御額並耳裏

一人是ヲノミスレハ　千金方云一人飲一家無疫一家飲一里無疫

人小給事有大根をとゝぶ女房人給まりて
扇ノうらへくに是をおく元日人〻持進乃ゆへな
荆楚歳時記案練化篇云正月旦春雞子赤豆七枚辟瘟氣又云梁有天下不食葷自此不復食雞子○今案ニ三元日精進ス人ハ梁武帝好佛遺風ナヘシ
もと江次第小みつ〻りこ獻小度漳散と供
御ニ奉る屠蘇と御菜乃儀式いこ〻ケ日ハ第三日ハ
付く御額并小御耳乃うへに付きる事右
乃第四乃指とゆ〻先〻付る也是ハ藥師乃
印相にて付とゝゆ此御藥乃儀式ハ十二代
法城天皇弘仁年中ハ〻めゝ給一人
是をのこ給ハ一家不病なり一郡ハ

是を飲給ハ一里ハ病なしとゝ
き功能ハ給まひ年のゝめハ是をとゝ

三　供御節供　同日

是ハ三ケ月乃事也寛平二年二月乃比ハ院（宇多天皇年號）
ハ別當善とゝ人ハ給はれて毎朝
調進ハゝる諸院宮ハ御節供ハ是ハ給ハ
なり異事いはゝ

四　朝賀　同日

是を給ハゝ也辰の時ハ天皇ハ大極殿
ハ幸なりて行ハ給也群臣ハ礼服を著

鼓ヲウチ鉦ヲタヽク ○元明天皇八年春正月甲申朔天皇御大極殿受朝皇太子始加禮服拜朝陸奥出羽蝦夷并南島奄美夜久度感信覺球美等來朝各貢方物其儀朱雀門左右陣列鼓吹騎兵元會日用鉦鼓自是始矣類聚國史七十一

近仗 ○江次第抄ニ云近仗謂近衛次將也

橿原宮 畝傍山東南都ヲ立タヒシ時皇居名也

日本紀ニ見ヘタリ ○日本紀ニ見ヘス舊事紀ニ見ヘタリ ○舊事本紀五大歳辛酉正月庚辰朔宇摩志麻治命先獻天瑞亦堅神楯以齋忌謂五十櫛亦云今木刺繞於布都主劔大神奉齋殿内即藏天璽瑞寶以為天皇鎮祭之時天皇寵異特甚詔曰近宿殿内矣因号足尼其足尼之号自此而始矣

同上書ニ見タリ ○日本書紀二十五大化二年正月甲子朔賀正禮畢即宣改新之詔

古ハ大極殿モアリシカハ也 ○類聚國史七十一歳時部天平十四年春正月丁未朔百官朝賀為大極殿未成權造四阿殿於此受朝焉石上榎井兩氏始樹楯槍 ○左經記云案大極殿體非寝非

してさなすゝ御即位乃儀式ふ用ひ内辨

なりとあり開門なとありてめしれ鼓を

うつしむれは群臣列して門より天子を

御座ふ渡りせ給へハ兵庫寮鉦鼓を執

鶏いて帳を八字ふかゝく近仗警蹕をせ

うし尚書主殿香をたて典儀再拝を

なふ群臣此時再拝乃奏賀奏瑞して二人乃宣命（謂少納言也）

小もてみく旅ア事也是い玄宗の時に見

嘉瑞を乃ふことを園よりゆをはそれを記

て今日是を奏する也其時群臣再拝を次ふ

祥瑞をふれい武官等歳れ旗をかろや也いと同

おくしき儀式とも也神武天皇（人王第一代）元年正月一日橿

原の宮ふてたくちし給く位に付給ふ也を

时宇摩志麻治命天瑞を奏ありけるより日

本紀小見えて是なとを始ともいへき

又孝徳天皇（三十七代）乃御宇大化二年正月一日御

門おりて此事侍りし同し書（日本紀也）小の見えて

是ぞ誠乃朝拝とハいへる也龍小六十六代

一条院正暦より後いありしも不定又記録ふ

も不見えられや古い大極殿（七十代後冷泉院御宇大極殿炎上）もありしはも今い

堂所謂廟作也諸寺金堂省廟作也

君子大私十七 ○ 六實蔵云大明無私照至公無私親

小朝拝計りにて成ぬれ

五

小朝拝 或コテウバイ　同日

此事は毎年殿下よりて元日にはれは天子を拝し奉るべきによりて清涼殿に人々公事小て侍るにあらずして朝廷の為にも侍らね共事佛事にも非ざる様は是は私乃礼也君子を私なしと云文の不宜事とて延喜の御門の御時小勅ありて延喜五年より太后時平公小停らく當られ侍りし也抑朝拝は百官悉く揃ひて以へども小朝拝はたゞ殿上まうりの也百官と

文選四十一李周翰注朝廷天子也

六十代

むかしかく猶されば小私なるより御とゞめりとて留させ給ひしや然に殿下の元正の日君臣相し奉る御事を申されけり小朝拝は同十九年に又とり行ふべく朝の様侍りし也其故は延喜の御子小殿下の拝殊にいとく悦させ給ひしかとも當代のみこ達は猶拝礼乃儀式ありてそも臣子の道はありとる理しれいそう殿下の拝の儀は然るべきことにて也臣下請しより貞信公の御記よの拝を猶有り関白太后以下ひきつれて奉拝の儀にて

皇子

舞踏ノ○拾芥中末舞踏事再拝置笏立左右左居左右左取笏立再拝
元日節會○江次第六元日宴會トアリ
内弁ハ江次第抄第一ニ大臣於承明門内弁備諸事故曰内弁第二大臣於門外弁備諸事故曰外弁ト
一ノ上○職原抄ニ云官中事一向左大臣統領之故云一ノ上関白之人爲左大臣時右大臣行一上事是依関白與奪也○同下ニ云是執柄依執天下之政無其暇仍官中諸公事併與奪次大臣之故以次人爲一上也

清涼殿の東庭(トウテイ)にて四位五位六位におよぶまで袖
をつらねて拝舞する威儀ことよりて
御らん事にて是なされは下として今く
頭(さふらふ)殿の中を先無名門(ミミヤウモン)の前に弓場殿(ユバトノ)にたち
なりて上首(シユ)の人諸(シラウ)人(ニン)ととけりく奏聞する
其後は御門はお御なりて小朝拝の儀式は侍
なり殿上は殿上にたるによりて小朝拝とは
申すやされは朝賀有年は行はれさる事なるへし

六 元日節會 同日

其儀小朝拝にてめでたいは内弁の大臣陣の座に

○江次第ニ云内弁召外記問諸司具不又召外任奏付蔵人奏之入御令候列諸司奏可付内侍所由仰次被奏若晩降若雨諸司不具時也中務省御暦奏宮内省氷様奏氷有様奏若違期不奏不参七也以不服赤奏写寸法日奏之若當卯日卯杖奏等也奉仰外記
七曜御暦ノ○延喜式中務省式ニ云其後官人率陰陽寮入自建春門進七曜御暦輔以上一人留奏其詞曰中務省奏陰陽寮供奉留其年七曜御暦進良久申賜止奏任無勅答若親王任御者以進礼良久乎恐美恐美毛申賜久止奏進良久乎他皆倣此
氷様○江次第抄ニ云宮

着く事を行ふ一上(イチノカミ)なきときして位次(ヰジ)の大臣
外弁は内弁(ベン)小(コウス)ありて職事(シキジ)をめして
御らん致るもの太子にも門の外事此一(イチ)の上の事
人はまへとりもしはしかて陣の端(ハシ)に
座して諸人にまいらして外任(ゲニン)の奏をそうして

江次第抄ニ云外任奏者諸國守介等或任符未給或雖給任符未赴國或爲濟權政入京朝參須節會之時外記注其人名事未始之前就内辨奏聞返給之時仰可候列之由

後れは小忌へうり諸人内侍に付て奏聞とる
是は御覧して返給ふ又諸司の奏は内侍所

○諸司ヨリ物ヲタテマツルヲ……ト云白馬節會ニ所参考スヘシ

小庭へきよし諸奏とい(ふ)しへ庭に
すみて奏しまうとりや諸司奏とは

内省氷様奏主水司奏
之此司屬宮内省氷様
者氷室厚薄寸法以瓦
石爲其様奏之

宮内省寮 ○延喜式宮
内省式云凡藏氷之處
收氷多少及氷厚薄毎
歲具錄元日群臣來奏
之前省輔已上將本司
入奏并進氷様其詞曰
宮内省申久主水司能
今年收太氷合若干處
氷若干室厚若干已下
若干已上益自去年
若干室減自去年若干
室供奉孔留事申給人太
宰府進孔留腹赤乃御贄
一隻長若干尺進平
申給登申

氷池風神 ○主水司式
云氷池風神大所祭山
城國五所大和國一所
河内國一所近江國一
所丹波國一所
○勸修寺池山城國五
所之隨一也名所方角
云小野池勸修寺ノ
池ナイリ延喜ノ御宇氷池
ト云也

七曜乃御厨氷様腹赤奏なる乃事也七曜
御厨とい中勢省より奉る日月日月の本金土
此七曜を注るなり此なる乃こゝろ也氷様い
文関省より奉れる年氷とおさめる而
此様を今日節會乃法もなく小奏聞とする
なり厚さ薄さいう程乃寸法なるなど
こゝに奏して其ためしとて法に成る
乃なれを奉る延喜式なる氷池風神
此祭なる法なり氷乃ひろはく聖代乃
氷乃ひめは幽玄なる法氷の池

釋家官班記下寮御祈ノ事

大法秘法を行ひ給ふ今ゆもなく氷で
閉ぢられしなり氷奉る也昔仁徳
天皇乃御宇六十二年小額田大中彦
皇子闘鶏とて云所に獵しに出給へく山小の
なり野中をこゆる時に菴を作りて
様なる所に人とをきて是を給ふ宮也
とゆこゝ時に法山乃あるり小法人をめして
とい勢給へ小氷室なりとゆ皇子はいへく
も氷池いう程にしておさめ給へ所に養へく
云也と一丈ひまり堀へく苔成を上小青へく

闘鶏稲置大山主也

茅蔭なしと成厚氷を敷て御小氷
ていかうなる大昇殿もとけ出て芝成たく
熱月ふりも升る事なく其時皇子供御
と仁德の聖代御門小奉分給ひれいなれめ
形ちすゝ小殿感すして皇帝まくみなまま
もの者ゝ是氷を始なりこと後雪
をしに芝成たさ成たく國く所ゝ小氷室を
置れ行しなりまゝ腹赤の贄として魚を流
紫ゝ奉御なり昔い稚く年貢をまくに
供しまゝゝ腹赤の食様として白いさ

日本書紀ト書

半中行事ニ御贄トアリ

たゝ成ゝる氷室て食ゝり景行天皇の御宮
筑紫の國宮古の郡長濱て海人芝を釣く
奉る其後聖武天皇の御時天平十年霜
十四日大宰府ゝり芝成なくる是ゝりて
年毎に年貢小供ゝと白きゝり宮ゝ
ゝるなり腹赤ゝ いまゝゝ魚の事ゝり

十二代

肥後國ニアリ

四十二代

七曜御暦氷様腹赤贄也

此三文を奏ゝる成諸司奏ゝは成
別御ゝ濱ゝ御河南殿小渡御なりて御
當日平明会土殿寮掃除南庭ニ云云

怪の内小法ゝ世行ふ内雜原度と毛て陳の
ゝ御ゝ成て靴を

靴倭名鈔唐令云烏皮靴赤皮靴音戈字亦作鞾和名化乃久都

ゝく芝ゝりさゝ小諸ゝ

守士郡 ○肥後國風土記云玉名郡長濱濱在郡西昔者大足彦天皇誅球磨贈禦還駕之時泊御船於濱云云又御船左右游魚多之棹人吉備國朝勝見以釣釣之多有所獲即獻天皇勅曰所獻之魚此爲何魚朝勝見奏申未解其名正似鱒魚耳歷御覽曰俗見多物即云介陪佐介今所獻魚甚此多有可謂介陪魚今謂介陪魚其緣也

宜陽殿元子 ○江次第云天皇著御帳中倚子近仗稱警內辨者宜陽殿元子內侍臨東盤內辨起座敬音稱雅經宜

陽殿壇上北行出自軒
廊東第二間斜行到左
近陣南頭謝座再拜頭乾
向先一揖次再拜次二
揖右迴經軒廊并東階
等又自廂南一間母屋
東第一間西進計座程
著之南儀於元子前謝
座帯剱人南衙行左右將
歩爲不令開門曹各率
剱碪也近衛八人開承明門左
右腋門左右兵衛開建
礼門闕司分居内辨召舍
人三音人四人同音
稱唯於承明門外云云
謝座○江次第抄云謝
座者内辨大臣蒙昇殿
著座之詔命而先致拜
謝之礼也先後一揖者
起居之節再拜者拜天
子之意也知足院關白
被命云乾是天位也拜
天者是拜天子之儀也
開門○江次第抄云南
殿正面門承明門也左
右腋門長樂永安門也
建礼門相當承明門也
時百官皆在門外至是
命開門者令群臣放入
也ニキイシ○江次第抄
云諸可昇著営上所敷
之座也引聲召之時曰
敷尹○江次第云内辨
宣侍座（侍引合）又云群臣
再拜謂之謝座堂上著
座謝之拜也○又云酒
正授空盞於貫首人羣
臣再拜酒正歸間起如
上謂之謝酒飲酒謝之
拜也粘臍○倭名
抄十六飯餅類粘臍辨
色立成｜油飾名也粘
作似人腥臍
也上女廉反下音齊○
同鑼羅唐韻云｜畢羅
二音

外辨小清く長樂門乃東乃脇なり是い大内
なる事也今清代かいもんぎれ所乃
幄乃ひと如まへて清くなり内弁宣陽殿乃元
（江次第抄云待召之儀也）
（幄四聲字苑云｜於角反帳也和名阿計波利大帳也）
子乃分宣へる後謝座れ仕まつる清涼羅て
堂と元子なる清く此乃作法進退ぐ内辨
（史記魯世家註故實故事之是者）
乃大事なて家れに清涼殿乃作法なるなめる
（文選四十六注故實先王之道也）
開門を仰く舎人二音めと大舎人四人唯稱
（江次第抄云召舎人者爲名少納言也）
奏お納云小清く旨示せはお納云清くとめと
（江次第抄少納言掌宣傳小事也）
次第小外辨乃上首なるなるとみく敷物乃
（異位重行體）
へく為座小列立る親王乃後小大臣と後小
大納云と元後小三位中納云其後小四位宰相
立川二位中納云い大納言乃未よりめる三位
宰相い中納言清涼小おるめ此天位重乃小
立宣へく後内辨まきめん代作とまきへい
敷居なり堂と奏へる度小へるへく云心な
（レキイシラ仰ル時）
ゆべ｜奏居謝座謝酒罪殿乃度と内辨
（二拜ヲ云）（二拜ヲ云）
御膳と下殿志く先と作と内辨
（内膳入自月華門供御膳供八盤諸臣諸仗共立供次ら膳）
先と供と後やぐく脇乃御膳代供と大宴
（拔御膳事江次第見タリ）
御膳乃なくそれ名はあれども其姿い
（倭名抄今按俗説梅枝鯛餅桂心粘臍鱉鑼鎚子團喜謂之八種）
なくて分へる粘臍（八種内）鱉鑼（藥名）鯛飯桂心なく清涼れ

字亦作𥻨𥻘俗云比知良餅名也○同餲餅四聲字苑云餲者與餳同俗云餲餅今索餅寄食也爲餅名未詳餅名煎麪作蝎虫形也○【索餅】江次第抄云麪加索繩也【國栖奏】○宮内式云凡諸節會吉野國栖獻御贄奏歌曲毎節以十七人爲定工國栖十二人笛工五人伹笛工二人在山城國綴喜郡吉野國栖川アリ○日本紀云然自此之後屢參赴以獻土毛其土毛者栗菌及年魚之類焉

物也餛飩(コントン)索餅(サクベイ)ハめくらかきぬきすれハ誰も見しらぬ〔江次第抄云一索餅也〕物也さて三献乃儀ハ一献に國栖哥笛を奏し是〔國栖奏歌笛於承明門外ニ奏之〕を吉野乃國樔(ス)人まゐる事なり應神天皇十九〔日本書紀十ニ〕年十月に吉野乃宮に行幸乃時國樔人参りて一夜酒(ヒトヨサケ)〔醴酒コサケ〕を奉りて哥をうたひまゐらせ〔歌日本紀ニアリ〕し人山陰乃あたりを求めくらひ又かへるを煮て〔蝦蟆〕名とは毛瀰(ケミ)といひて甚味(ヨキ)なるとて食ふるとや吉野川乃ほとりにて菓(コノミ)をとりしくらふ〔國栖川トテ今ニアリ吉野ヨリ五日路奥也〕なりけれハ路さし見待る常に來て斯事不叶とて世をやくる其後

ミキ○江次第抄云酒訓三寸者飲酒則邪風去皮膚三寸云々猶多説今略之○御酒勅使者給酒於侍從壂之勅使也勅使參議奉勅而撰侍從四人爲勅使也【立樂各二曲】○後醍醐天皇年中行事立樂アリ日月華門ヨリ左右樂人春庭樂ヲ奏シ馳道ニスヽム左右各二曲萬歳樂地久賀殿長保樂ナト也臨時勅ヨリテ此比各三曲モアリ大友近來此事ナシ當代舊ニ及リテヲコサレタル也【宣命】正月一日宣命案天皇我詔旨良萬宣大命乎衆諸聞食止宣今日波正月朔日乃豐樂聞

常に参りて年魚(アユ)を持れ物を献ることや今乃國栖乃奏とて哥をうたひ笛を吹きなるハ吉野より年始にまゐりて心なり二献にハ御酒(ミキ)の勅使乃儀ありて三献〔大夫達ニ爾拝當給〕に立楽(タチガク)各二曲を奏してまた宣命〔給宣命〕を下され群臣拝舞ありて〔群臣兩段再拜〕いふ事なきそのいふくさしけまいふれ不及其上いつとも此節會なれハ諸も於ける然りし称此節會ハ天子紫宸殿に渡御なりて群臣百官に酒を給ひ宴會ある也
四十一代
持統天皇四年正月に公卿以下内裏に召して

食須臾介在列又賜毛寒介依ヒ御被賜波久止宜

宴會ト書テ仁德天皇紀ニ宴會ト書テトヨノアカリヨ

神武天皇御宇日本紀

神武天皇紀天皇以其酒宴班賜軍卒

續日本紀寶龜四年正月丁丑朔宴五位已上於內裏賜被

(裏)ハ篇云賞賜也

とよれあるもの也とて河内の宴會と書くいこ
ふあるまことに侍り大うち神明ら忌れ
給て侍るや豐明節會は正月中辰日
神武天皇乃御宇にも新嘗を侍とへく
酒を給ひ事いはれ紀に乃て所乃美かと
とも事法發つまいへきに光仁天皇
寶龜四年は春のいめ侍に小炊に海
侍ひとりて今とはれ侍りて事を
ふ祿を給事を

四十九代

七 內侍所御供 同日

三種神寶授給事 ○神代卷下天照大神乃賜天津彦彦火瓊瓊杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種寶物

我ヲ見カコトク ○神代下天照大神手持寶鏡授天忍穗耳尊而祝之曰吾兒視此寶鏡當猶視吾可與同床共殿以爲齋鏡

見ひ給日小侍ちとり新く也寛平年中小侍
ち此內侍所とりい三種乃神器乃内一
也ち軍振神代乃事ちや天照太神は天
は怒戸侍さ一籠給事る時石凝姥とり
神侍ち稱給日神乃御ちられ鏡なり是
と八咫乃鏡と名侍ぞ之後地神第三代
天津彦彦火瓊瓊杵尊は河一原乃國は宮
と成給く天ちり給一時天照太神こ
侍ちり三種乃神寶侍ち所事給とく此
御鏡侍い我を見るごとく敬ちり祝

五十鈴川、今内宮宇治河也

御記八天德御記也

御記曰天德四年九月二十四日鑿求溫明殿所納之神靈鏡并大刀契等、申時重光朝臣來申、言丸上有鏡一面其鏡徑八寸許頭雖有小瑕、專無損圓規并帶等甚分明、見之者無不驚感、釋日本紀第七引之

内宮ノ也

十代

六十二代

二年九月廿三日庚申夜

三年後文治元年二月廿四日

二年没落京

實頼公

暫也

辰巳方

小野宮關白抽○禁祕抄云天德燒亡飛燃南櫻ノ小野宮大臣請抽也

二位尼○山槐記云平時子清盛妻懷安德天皇沒于海

なり有統ノ神鏡南殿ノ櫻ノ本ニ埋ラルヽ事

ヲ小野宮實頼公ノ抽ノ櫻ノ下ニ埋ラルヽ

ト云ヘリ然ルニ二年没落京ノ寿永ノ比二位

尼ノ實ニハ平家ノ一門ノ人ニ第十代崇神天皇ノ御時帶鏡ノ

ノ居ル帝ヲ懷奉リ奉リ入ル海ニ沈ル

トナリシ時ヒ此御鏡ハ海ニ沈ム

ヘキ物ニ非ス今ハ宮中ニ秘ス

ル所ノ神宝内侍所ノ内ニ

神宝内侍所ノ内ニ

辰巳方

屋也事ナリ

ヲ同殿ノ御座ノ一所ノ

主上御冠ハ必穴アラン　○江家次第十一云内侍所者神鏡也本與主上御同殿故院被仰云帝主冠巾子左右有穴是内侍所御同殿之時主上夜不能放冠給御眠之時御冠屢落仍以撫刷華自巾子穴通御髪也

白川院　○禁祕御抄云白河院御宇御日内侍所神鏡昼飛出欲上天而女官懸唐衣袖奉引留依此因縁女官奉守護

内裏觸穢　○禁祕抄觸穢時恒例供神物先例不同與寛治八年陽明門院崩之時無沙汰（後三条御母后）有内侍所御供（三月一日也）去年内大臣穢及禁中時供之今度諸社祭雖無引准彼例有供物但又被止有例

年中邪氣ヲノゾクト云事文　嘉祐本草云新汲水却邪調中下熱氣並長飲之本草新汲水毎朝一番ノ及ミヲノ水也

主上御冠ハ必穴アラン　○江家次第十一云内侍所者神鏡也本與主上御同殿故院被仰云帝主冠巾子左右有穴是内侍所御同殿之時主上夜不能放冠給御眠之時御冠屢落仍以撫刷華自巾子穴通御髪也

白川院　○禁祕御抄云白河院御宇御日内侍所神鏡昼飛出欲上天而女官懸唐衣袖奉引留依此因縁女官奉守護

内裏觸穢　○禁祕抄觸穢時恒例供神物先例不同與寛治八年陽明門院崩之時無沙汰（後三条御母后）有内侍所御供（三月一日也）去年内大臣穢及禁中時供之今度諸社祭雖無引准彼例有供物但又被止有例

年中邪氣ヲノゾクト云事文　嘉祐本草云新汲水却邪調中下熱氣並長飲之本草新汲水毎朝一番ノ及ミヲノ水也

[注釈]○大江氏太宰帥也○江次第抄云江帥次第云飲御若水之時有死萬歳不變水急急如律令云云

[後院]○拾芥中末後院四町五條坊門南五條北大宮東堀川西○江次第八裏書云後院謂冷泉院朱雀院等○源氏物語若菜巻河海抄云十二種若菜

蘭　苣　芹
蒺藜　葵　蓬　水
蓼　水雲　芝　菘

此中菘松葉說ヲ白川院松献人ヲ以ヲ僻事也ト仰ヲ以ヲ大外記師遠ハ小大根由申ヲ其說ヲ用ラレヲ由見舊記

[師遠]○江談抄第二云大外記師遠諸道兼學者歟今世尤物也能達者不劣中古之博士歟○職原大炊頭下近代大外記中原師遠子孫相傳之温職中尤貴腴也

[コホ子]○和名抄温菘崔禹錫食經云温菘音終和名古保孫味辛大温無毒者也

[正月七日]　歳時記云正月七日爲人日以七種菜爲羹

[注釈]○大江氏太宰帥也○江次第抄云江帥次第云飲御若水之時有死萬歳不變水急急如律令云云

[後院]○拾芥中末後院四町五條坊門南五條北大宮東堀川西○江次第八裏書云後院謂冷泉院朱雀院等○源氏物語若菜巻河海抄云十二種若菜

蘭　苣　芹
蒺藜　葵　蓬　水
蓼　水雲　芝　菘

此中菘松葉說ヲ白川院松献人ヲ以ヲ僻事也ト仰ヲ以ヲ大外記師遠ハ小大根由申ヲ其說ヲ用ラレヲ由見舊記

[師遠]○江談抄第二云大外記師遠諸道兼學者歟今世尤物也能達者不劣中古之博士歟○職原大炊頭下近代大外記中原師遠子孫相傳之温職中尤貴腴也

[コホ子]○和名抄温菘崔禹錫食經云温菘音終和名古保孫味辛大温無毒者也

[正月七日]　歳時記云正月七日爲人日以七種菜爲羹

子日 ○拾芥上本云正月子日登岳何耶傳云正月子日登岳遠望四方得陰陽静氣除煩悩之術也 十節記
○扶桑略記宇多天皇寛平八年閏正月六日有子日宴行北野雲林院云
○菅家文草第六扈従雲林院不勝感歎聊叙所観序云予亦嘗聞故老曰上陽子日野遊厭老
○又曰倚松樹以摩腰習風霜之難犯也和菜羹而啜口期氣味之克調也

圓融院ノ子ノ日ヲせさせ給ヒし ○十訓抄ニ云圓融院ウせサせ給テ紫野ニ御葬送有ケルニ一年此所ニテ子日せさせ給ヒしヲ思ヒ出テ行成卿カクゾヨミケル
ヲクレじト常ノミユキハイソギしニ煙ニソハヌ旅ソ悲しキ
出家ニテハナケレドモ思入タル志深クヲボユ

日本紀ニ云 ○日本紀三十持統天皇三年正月乙卯大學寮獻杖八十枚
○卯日ニ杖テ云ル杖故ウツエト云 文徳實録ニ六剛卯杖ト書タリ 漢書王莽傳中云正月剛卯金刀之利 服虔曰剛卯以正月卯日作佩之長三寸廣一寸四方或用玉或用金

十　子日遊

是むかしハ人〻野へ出て子日とて松を引きる也朱雀院（六十一代）圓融院（六十四代）三条院（六十七代）など御門みなも此御遊ありしが中にも圓融院の子日をはさせ給ひしは寛和元年二月十三日の事也（見小野宮右大臣記）路の程は御車也しが紫野近く成て上皇は御馬にめされけるに右大臣以下皆直衣にて扈從し人々は布衣なり幄の屋をまうけ幔を引めぐらし小庭しかして小松をひしと植並べ小松物打ひつ檜破子やうの物をまうけて和哥を獻じ其時乃序ハ平兼盛しるし清原元輔曾禰好忠などいふ哥人どもめして哥よませられ其時乃哥なども代〻集にのせられ侍りてかくれなし

十一　御杖　上卯日

持統天皇三年正月乃卯の日大學寮より杖を奉る事日本紀にあり又仁壽二年正月に諸衛府卯杖を獻じ精魅をはらふとて毎に是を以て悪鬼を拂ふものなり

成用桃著革帯佩之今有五在者銘其一面曰正月剛卯云云

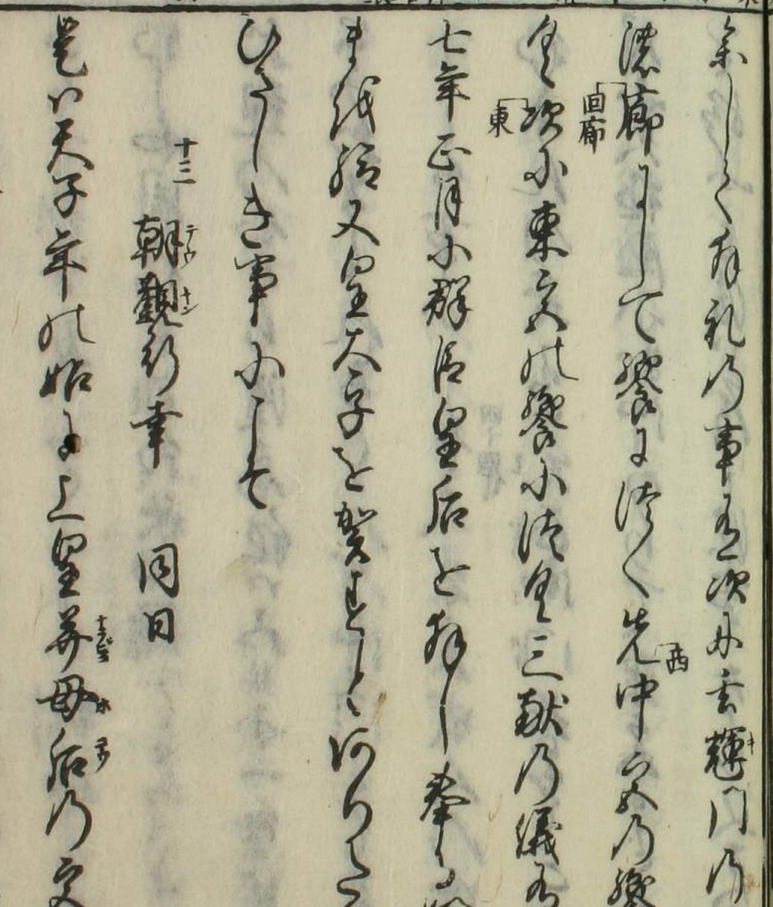
精魅○論衡訂鬼篇鬼者老物精也夫物精也夫其精爲人

色色木上延喜式○左兵衛府式云凡正月上犯督以下兵衛已上各執御杖一束次第參入立定佐一人進奏其詞曰左右兵衛府申正月能上卯日能御杖仕奉氏進良久申給波久申登勅曰置之醫師已上共稱唯獻畢以次退其御杖槙檀三束一株爲束木瓜三束比比良木三束牟保已三束黑木三束桃木三束梅木一束已上二株爲束

御木六束四株爲束中宮東宮別槙檀一束二株爲束木瓜二束比比良木二束牟保已一束黑木二束桃木三束梅木二束椿二束並各長五尺二寸○裏書云玄輝門北面正中之門也謂之北廊玄輝門西板著中宮饗東板著東宮饗

同日○拾芥云二日朝觀行幸或吉日

公事根源上



汪次第裏書――在進物所西有別當預

生中行事臺盤所奉六府奉卯杖ヲトリ畫御座御帳夜大殿御帳四隅ニ立ル也

生中行事獸姿ヲトリ

延喜式ハ正月卯日兵衛督以下兵衛已上各執御杖一束次第參入立定佐一人進奏其詞曰左右兵衛府申正月能上卯日能御杖仕奉

御杖ハ槙檀三束比比良木三束牟保已三束黑木三束桃木三束梅木一束

十二 二宮大饗 二日

汪次第卷一裏書親王八公卿号王卿也

二宮ハ東宮中宮ヲトリ申ス也

七年正月ハ桓武皇后ヲ奉ル母ト

中務卿親王大臣ヲ奉ル母ト

ひらき事ハしてき事ハ

十三 朝觀行幸 同日

光仁天子年ハ桓武ノ皇后母ト

幸ハ事ヲ張帳ヲ皇太子八月ハ

紀きうの儀いとまハ

和銅二年 見續日本後紀

公事根源上

周禮 ○周禮春官大宗伯春見曰朝夏見曰宗秋見曰覲冬見曰遇時見曰會殷見曰同此六禮者以諸侯見王爲大

漢高祖八 ○史記高祖本紀六年高祖五日一朝太公如家人父子禮太公家令說大公曰天無二日土無二王今高祖雖子人主也太公雖父人臣也奈何令人主拜人臣如此則威重不行後高祖朝太公擁彗迎門却行高祖大驚下扶太公太公曰帝人主也奈何以我亂天下法於是高祖乃尊太公爲太上皇心善家令言賜金五百斤

國史 此國史續日本後紀也

文王世子 文王世子篇云文王之爲世子朝於王季日三雞初鳴而衣服至於寢門外問內豎之御者曰今日安否何如內豎曰安文王乃喜及日中又至亦如之及暮又至亦如之

○桐壺卷河海抄上達部殿上人也堂上人總名也

公事根源上

五十三代

年三月小淳和御門紫宸殿小中御門ハ東文殿觀乃儀乃儀乃ちり羅殿乃後御衣を給ふ東文殿觀乃儀乃儀乃ちり羅殿乃後御衣を給ふ

ちよ仁御乃御門母后小紀きん乃ちこ宍

哈衆流小行幸乃ち小彼時御門南殿を

うて物とあくしく曉行し事を

行ち乃周礼云日紀秋日覲とうてうち毛

紀覲乃ちり漢高祖い日小一度父乃ち

云小紀きんれちり人乃御門ち毛ち

しき事小ちて又東文成人乃御時

四十四代

紀きん乃義を元正御門養老二年正

月小大極殿小出御ちりて東文ちうれか

王侯小ち後い度ち法事ちり又天長十

五十三代

年三月小淳和御門紫宸殿小中御ちうい

東文紀觀乃儀乃儀乃ちり羅殿乃後御衣を給

ふ文王法世子ちうしと記王季小紀ちる

事日小三度ちて礼紀小みて乃ち是

うちて東文紀きん世倒ちうあ毛

文王世子篇

西

源時宮

毛い稀改関白家小ち毛乃紀大臣ち下世上

四月

公事根源上

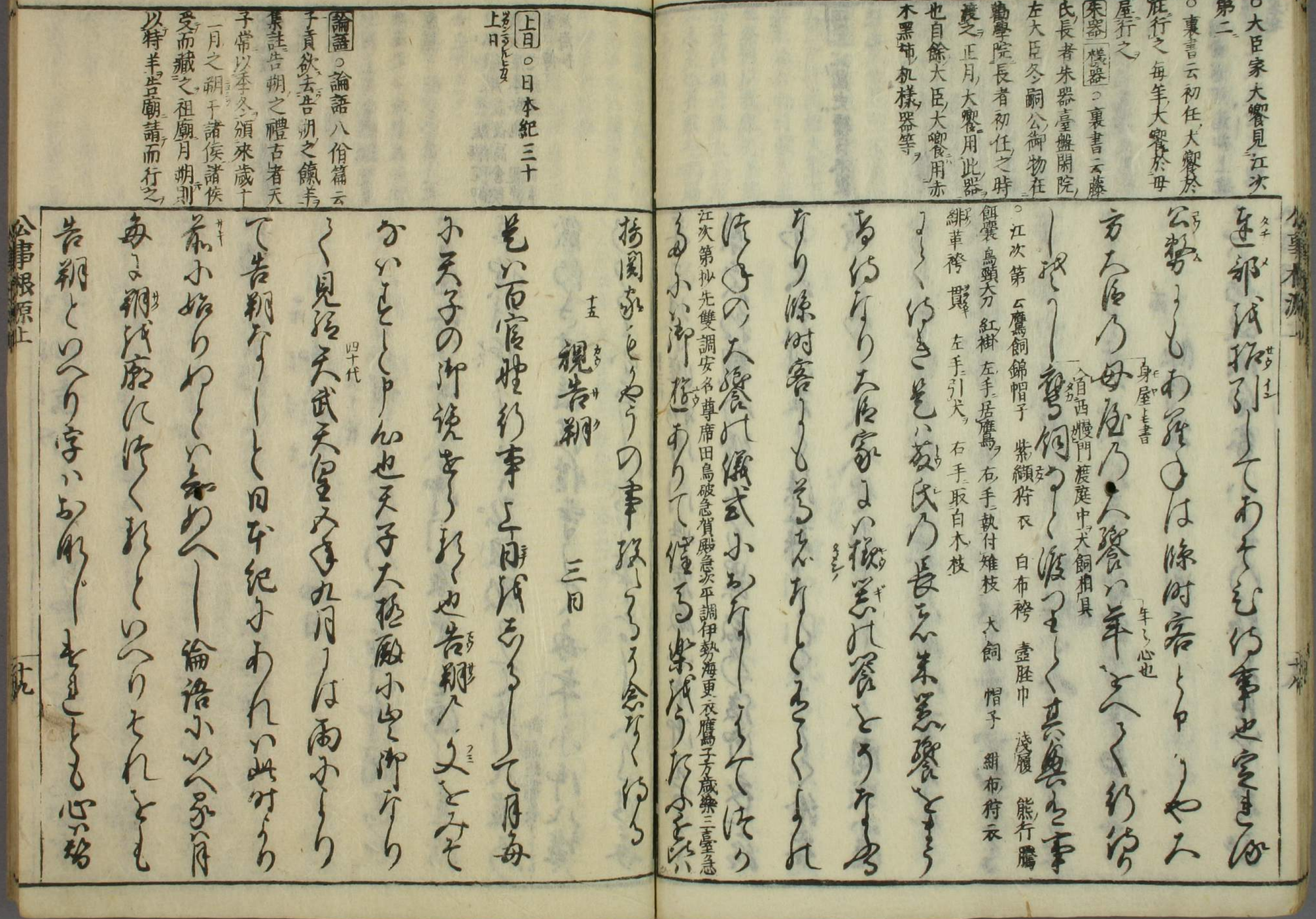
○大臣家大饗見江次第二

○裏書云初任大饗於庭行之毎年大饗於母屋行之

朱器 樸器 ○裏書云藤氏長者朱器臺盤閑院左大臣冬嗣公御物在勸學院長者初任之時渡之正月大饗用此器也自餘大臣大嘗食用赤木黒柿机樣器等

上日 ○日本紀三十上日

論語 ○論語八佾篇云子貢欲去告朔之餼羊集註告朔之禮古者天子常以季冬頒來歲十一月之朔于諸侯諸侯受而藏之祖廟月朔則以特羊告廟請而行之



十五 視告朔 三日

毛い百官悉行事上日毎
ゆ天子の御後をうけて告朔入文をみそ
かいとしとゆ也天子大極殿小安殿御なり
く見給天武天皇四十代九月十日の雨ゆうり
て告朔なりしと日なし紀ゆあれい此ゆうり
茶ゆ始りゆくい和ゆ人論語ゆ以人家月
毎ゆ朔ゆ廟に行くまいりたれをも
告朔とゆうり字いゆ解ゆをまとも心ゆ

國忌職員令義解謂先皇崩日也○日本紀二國忌ヲハテト訓ス

○村上天皇醍醐天皇第四之子母皇太后藤原穩子昭宣公第三之女也

○弘徽殿後醍醐院御御文庫本點也親範卿點之源親行說此事猶口傳河海抄

○勤操和泉槇尾寺僧弘法師也八講事見元亨釋書勤操傳

議所○參議所在日華門北掖勤盃辨少納言相分勤與端內竪取瓶子。裏書アリ

[皆文]○江次第云件筥入五位已上歷名一卷諸司主典以上補任二卷下武官主典已上補任一卷令外官一卷諸國主典以上補任一卷下十年勞帳一卷

○江次第云盛續紙二卷於柳筥兩卷七八枚同云次叙ノ加階者姓尸其從下一姓尸其同是殿上一加階也。召頭藏人令撿簡之後

十六 御國忌 六十二代 四月

二月四日ハ村上天皇乃母后ノ御國忌ノ也

[illegible]

華嚴經ノ極[illegible]ク弘徽殿ノ御八講乃御讀經論義ナトアリ

儀ノ[illegible]其後法性寺ノ毎年ノ御八講

[illegible]

八講ノ事ハ勤操ノ[illegible]云ヒシ門乃五十代桓武天皇八人分法華八卷四日朝夕二座各講一卷名月法華八講

延喜十[illegible]ノ[illegible]ノ[illegible]ノ石淵乃八講ノ石淵寺大和アリ

[illegible]

十七 叙位 當六日迎代者

其儀大臣以下乃座ノ[illegible]

[illegible]次ノ儀ノ[illegible]勸盃ノ儀式ナリ

江次第抄勸盃儀北山云其儀於北門前唱平行之如旬儀也

[illegible]ハ心事[illegible]

石階壇上取笏二人相對酌酒唱平擬把人揖之突左膝欲了起又酌酒畢次

[illegible]

參之
氏爵申文○江次第云
件氏爵等申文在硯筥
外記史依上日叙之件
申文在硯筥入内覧一ツ
加階叙位之間叙従下
了後令殿上弁名外記
勘文不入物進之毎事
蔵人外記諸宮給雖下
姓叙内階自餘依姓叙
内外階若有疑姓者先
叙外階後日依愁叙内
階朝臣外階是朝臣姓叙外階
異内階是非朝臣姓叙内階也如清原真人
真人宿禰連直公縣主
忌寸首王平源藤原橘
菅原大中臣高階在原
官道已上不叙外階必
叙内階叙畢入筥奉執
政覧畢給後大弁退

次第ハ御前乃座に着く関白なりとも（執筆大臣 謂関白外第一大臣）
執筆めしよりて奥座にすゝみて清く執筆も十年乃
労帳をうし續労帳にて叙位を次第に叙王源藤橘乃
（江次第二ノ二十葉申文被申加階之趣也）
氏乃爵乃申文入内ノ加階乃勘文なといふ事侍る
（二巻二十一葉勘文可案取叙人数）
（江次第西宮云五位従上）
はなくしられハ記に不及推古天皇十一年十二（三十四代）
月はしめて冠位をさためらる大徳小徳大
仁小仁大礼小礼大信小信大義小義大智小智
此十二階也今ハ色ハ替りて執事ありと
と位乃かはりをさためられしハ二樣なりし
天智天皇十年正月に法度を施して爵位（三十九代）
を授られしも此叙位をもしはじめとは六日にて侍
しぞ天徳五年より五日に始め此儀ハあり
曉なりしにおりてハ七日節會乃儀急なり
しくとりおこなひ事はつりけれハ今
ハ初まりて五日に改て滴節乃主上出ハ執柄
なりし法成寺日に於ての禮ハ六日に行ふ也
事終法務事なり

衰日○拾芥下末生年
衰日子午生ハ丑未 丑未生ハ
子午 寅申生ハ巳亥 卯酉生ハ辰
戌 辰戌生ハ卯酉 巳亥生ハ寅
申

十八 白馬節會 七日

此節會の事大方ハ元日なりしに於
元日ハ御乃横わたる乃外贄御膳なとあり

天竺貝 多羅葉 ○翻譯名義集二多羅舊名貝多此翻岸形如此方梭欄直而且高極高長八九十尺華如黃米子有人云一多羅樹高七仞七尺曰仞是則樹高四十九尺西域記云南印建那補羅國北不遠有多羅樹林三十餘里其葉長廣其色光潤諸國書寫莫不采用

御弓 ○裏書云爲射禮供天子御弓也萬葉歌曰御執乃アツリノ弓ニ云俱舍四肘爲弓量一肘一尺八寸四肘七尺二寸爲弓量多羅葉長七尺二寸

乳記 ○月令云天子居青陽左个乘鸞路駕倉龍載青旂衣青衣

○又云立春之日天子親帥三公九卿諸侯大夫以迎春於東郊還反賞公卿大夫於朝

天用 ○史記平準書云天用莫如龍索隱曰易云行天莫如龍是也地用莫如馬索隱曰易云行地莫如馬是也人用莫如龜索隱曰礼云諸侯以龜爲寶是也

ふしてはかなへく諸国法奏といふなりふ
ゑ兵部省の奉りの御弓奏いりの弦四
弁に奏ゆをとれなりあれ日ふあてはは
ゆよりてくなりきてくされけはたく御
弓奏作やく給ふ天竺の貝多羅葉い其長
兵部省御弓奏
さ七尺ゆすなりりけも七尺ゆすれ
江家第抄今案萬葉云御執アツリノ弓ニ上詠之御執ミトラシと讀ベトタダ五音通故ミタラシも御字故弓ヲコ ヲフレ上云也
ゆよりをとりてはりつゆ白馬の節
會をあひをきるほ節會ともりをり
をあい馬い陽の弦なり青い春法なり

毛ゆよりて正月七月ふ青馬をみまはを
中世邪氣の千をとりふ年又行りり
仁明の御門嘉和元年正月ふ豐樂院
文德實錄第四仁壽二年正月甲戌幸豐樂院以覽青馬助陽氣也賜宴羣臣如常
りは紫宸殿にて御覽きりりされ式
弓射事礼記ふ春を東郊ふむりへく青
馬七文成列りとあり七いゆ陽の数也
ゆ陽の月なり五十ゆ紀ふ白馬をりれ
賢木巻河海抄引之
性法年とを天ふ白龍有地ゆ白りを
又弓射用は弱なり地用いりを人の用い飛

○江次第云件御馬本必二十一疋也毎年左右寮各十疋進之其殘一馬稱之餘馬隔年兩寮互進之

○裏書曰御馬本數二十一疋禮記曰以青馬七疋然而用二十一疋者三七之義也三陽之義七日義之由見寛平御記

○毛ツヲ毛色書付ル事

心得ルナレドモ馬數付ル事モ九ヘキ歟雄略天皇紀馬八疋ト云コヲヤツケハト歌ニヨメリ

○小安殿江次第抄云大極殿後房也

なりとや年久しく仕へ奉る今は老舎人い三七日一さをひ命なり老三い三陽ふりと七いちふかあつ年寛平の御記の御ら給ふ今日乃元旦けれ養ふ養ふあ毛ツ毛を白ら戌とし

ら給ふ新年也儀式なりは大うと元日ふれかし毛ふ事なれい記すも不

跡やうあれい書のきは天武天皇十年正月七日小御門小安殿小ゐ中て宴會ハ儀ふら老やと七日ハ節會ハ始なりへうん

御齋會

八日

老い大極殿りて八日ふら十四日まて七ケ日ハ

乃家勝王經ハ新嘗祭ハ國家ハ護持ふて功能

ハふら此經ふらい國家ハ護持ふて功能

ハふらふて老ふ乃乃ふ始ふ老ん條

世ふふふふ天平元年十月ふ大極殿ふ

條ふふふふふて武天皇九年ふ月ふ

く金光明經家中なふひよ諸国ふて

條ふふふ老ふん之ふ始ふいて年ふ桓五十代

武乃御宇延暦廿一年正月ふふふ

○金光明經即寂勝王經也金光明最勝王經十卷大唐ニ藏沙門義淨奉制譯

内道場○僧史略云内道場起於後魏而得名在平隋朝

○文苑英華第二百二十虛綸送契玄法師赴内道場詩昏昏辭老夫灌頂過醍醐御呈嬪心鏡君王賜髻珠降魔須戰否問疾敢行無深契何相必需宗本不殊

治部省○延喜式玄蕃寮式凡大元帥法毎年正月起八日至十四日二十七箇日於省修之

二十 真言院御修法 同日

去七日より今年 今年 金剛

涼和天皇年号

寿永元年号

偏天皇年號

十一月乙未卜奏

去元帥法 同日

治部省より七ケ日真言院正月御修法奏状

東栖山城ニアリ醍醐邊也

○常曉傳在元亨釋書

法琳寺○拾芥下本云法琳寺太元堂是也太元令移給井有之以彼水行彼法文徳御時常曉律師入唐之後造之在小栗栖

大輪轉小輪轉○江次第抄大輪轉女司以下七人輪轉叙爵外記進其勘文中古以下絶畢○江次第云小輪轉
闈司　主水　東豎
大輪轉　女司　主殿
女官　御手水　女官
掌縫女官　闈司　主
水　東豎

うつか勘文○江次第云空勘文自後朱雀院時不載可叙之者只載例許故稱空勘文

外典は不空といへとも常曉の弟子をみ
くひうかゞよさ川きうとうや其法傳知し
事小栗栖乃法琳寺と云所にて修し
（文徳天皇ノ年号）齊衡の比天下に大旱か神泉苑
にて此法を修しきぬり白龍現じて雨
をふらし侍りしとなむ

廿二　女叙位（江次第三）　同日（江次第二云式日近代擇吉日）

是は女房乃位階を叙せらるゝ事にて儀式
は外記を儀式なとはいかなる叙位に同じ大輪小輪（轉）
てん小わてんてんきつらく弁乃やうなる

切杭○江次第抄切杭如斷杭生若也

二位三位し○後醍醐年中行事云二位三位ナとなへキ人アレハ叙セラル、也

勘文なとして紙あり切杭の（江次第ニアリ一説キツクイモ）やうなるといふは
女人の生年十一歳乃女官四十歳の労ある
を叙爵せられ也二座は法十歳乃女房
母なりしもなるい其間乃労をとんかへて母
れ此家と女乃十年まて云合て四十年の
労あるなして又位乃しやく誤なり也是浅き
つまりの法なと又とはいふ由しく文典侍掌侍
待命婦蔵人東豎子なとしく是わ浅叙
せらる事あり二位三位なとせらるべき人は
後の叙まて侍の中にも弁侍まらせられ

三子 ○江次第抄云東堅以三子爲東孺英舊薄多以紀朝臣季明阿閑宿禰友成爲其名中古以來以季明定爲其名不似尋常事也

持統天皇御宇 ○日本紀持統天皇五年春正月癸酉朔賜親王諸臣內親王女王內命婦等位

十ノリ 神武天皇紀ニ稱ナヲナ・ノトヨム

西座 西宮記不破節會西座爲女王座 ○江次第云賜時服王定四百二十九人待其死闕依次補之但改姓爲臣之闕不補其代隨即減定額數凡賜祿女王定二百八十二人其隨闕補代及改姓不爲闕

十三 給女王祿 東書ニ女王之一世已下四世以上也 四日

參議辨史以下ノ女王ニ祿給事ありて貴

[注次第云其祿法人別絹 足綿六也]

ノ門ノ內法

王四百廿九人女王二百廿二人女王二百廿二人と宣旨

く年毎ノ祿給事ありとて女王

祿ノ字ハ書ラレタレドモ祿ト計

讀ミ女ノ字ハ略ス也

十四 賜居除國 十一日

賜居ハ印宣旨也ト注也

宣ハ諸國ノ使ノ行ハ年給

あるこれは中世外國の人をあらく任官
せらるるあるこれは上の侍よ名はあらは
ゝ其作法執筆の大法をあらく申侍
弘庵て事成ぬ中ゝなくなくよ
自作ならく大間かかくの成はとていと
ゝ執筆の雑儀とて家々
口傳流の所なくもさはくの作事り
ゝ大ゝ諸司奏官奏叙位除目成ぬ四ケ
大事とて有職の人ゝは殊さらなる
なへ名替國替次任名替
名替國替名秩滑更任任

執筆硯不用唐硯筆不用丹管班竹等故實件筆可用白管

磨墨事除目薄墨叙位濃墨云云一度磨之不再磨凡爲令水皆爲墨久磨之○江次第執筆事條尻付事依前例是風記也以略爲先執筆之人書自名齋院齋宮不必注某親王

大間カタ○後醍醐年中事云凡一人任ス二七作法アリ申文ヲ讀申ヨセ物ヲ見ル大間其所ニヒラク筆ヲ添テ大間ニ書ツク申文ニテンヲカクカクルカリ ウススミニヨセ物テヒラツク必筆ヲヒテイタニヨク也

名替年限久過之書様

相模國權掾正六位上秦宿禰連正 俗承暦三年内給任

伯頭助改任

近江國少掾正六位上荊田宿禰信正 祐子内親王延久三年祐山背正忠不給任符秩滿代

同任符返上書様

常陸國大目正六位上葛井宿禰宗時 上右衛門督源朝臣承暦二年給三田吉頼任符改任

臨時給名替書様

陸奥國介正六位上皇人部宿禰如光 俗左大臣承暦三年臨時給 紀久遠改任

薨卒公卿名替書様

播磨國權大掾正六位上文宿禰友成 俗故式部卿敦康親王寛仁三年給姓長文改任

國替

御返上なくしてかくの如くなくて
そ除目ふ法もちくく可知事なくもい十年の
学もきい先くく百文法學ることを書
給ふ 十年學モ 此文後醍醐年中行事アリ
ことなくんや他ばとく淡路
ゝ事なくて式ゆは
ゝ捨事なくれ
十一日ゝ始りて十三日ゝ三ケ日なり
荒木事紀景行天皇五十一年秋八月命武内宿禰爲棟梁之臣○日本紀私記云可謂大臣之始歟○貞觀政要註横梁取其勝重也
景行天皇ゝ内ゝ宿禰棟梁ゝ
ふゝ皇大化ゝ八省百官

日本紀ニアリ

伊豆國
掾正六位上金刺宿禰孫爲頼 停尚侍藤原朝臣眞子承暦元年給二合所任筑前掾上毛野高平所任
權掾正六位上伴朝臣爲重 停左兵衛督藤原朝臣承暦二年給仮蔵五節舞姫二合所任上総大掾大岳良貞所任
是名國共替之書樣也
任符返上國替
尾張國
掾正六位上大江朝臣浦長 返上前常陸大守貞平親王正暦五年巡給二合伊豫掾藤原爲恒任符所任年限多過
大隅國
掾正六位上藤原朝臣篤孝 前太皇太后宮永祚一年御給伊豫掾
越智隆盛不給任符秩滿代
次任更任
土佐國
大掾正六位上日置宿禰忠久 權大納言藤原朝臣永保元年給二合所任刑部吉安不給任符秩滿仍更任
是得替更任他人申任同官之書樣也
○朝野羣載第七 出名替
正六位上藤井宿禰孫爲里 望播磨掾
右者寛治元年正月以安倍則枝任備後掾而稱非本望不賜任符仍以爲里可被改任之狀所請如件
承徳二年正月廿五日
關白從一位行内大臣

つまさきい大臣大連なといふ号はなわき文武
天皇の大寶元年 大織冠 濱海公不比等 卿 勅のりく
律令定官位階 職員誤脱 官位令職員令
後おほくはなりぬるを官もまさしく人
ぶ職もはりきはと令の内官といひ
内大臣中納言大寶以前官十上二内大臣六三公外十数六寶元年令不載中納言八大寶元年三月
つゆ但内大臣中納言云い大寶元年令不載中納言八大寶元年三月置仍養老令三載名
置不同年八月令撰不故不載九年後慶雲二年更二中納言二号
ともこ号なれとも官位令はの勢ふ
まさに定くあるを事かんり京官
除目とい京ふ有法目録とて役位はい
内中の人々官をなる也

十四日御齋會内論義 十四日
天極殿 七日講也
くはりの御物忌 結解なり内論義い御殿
論師おくて論義をはい
内論義とは聖徳孝德天皇白雉二年四
月小西 源門 内裏小殿 無量義
經講 法華 小西門 東資 論義 者
一千人乃御 聖徳 日本紀 日本紀
きり又ハ長 二十五 法華 妙 延暦寺 僧
澄 とはく論義 ありとみくり是なるや

藤原朝臣

蚩尤ト云惡人 ○本朝月令ニ云黄帝伐蚩尤之時以正月十五日伐斬之其首者上為天狗其身伏而成虵靈 夢浮橋河海抄引之

事殺るもの角をうゑん

廿六 獻御粥 十五日

昔他國乃事しらず蚩尤といふ惡人ありき
う黄帝と御門とてひく二月十五
日小蚩尤はいまとなれぬを首は天狗と
成くるを虵靈とかなる是ふるてなり
宮乃時おぼきの粥とて宴中小藥と
高く天狗を祭くを後東ふ向の年浮く
ひきまつきて是我合をれい事中ち和氣
代のそをとりみ本宗のこまくる辛民ひと

免あり〜ひ是も仏ゆ〜ひて二月十五
日ゆ巷中ゆ〜て〜ちをぬ云靈魂〜くまち
て通流ゆ〜ひく行人成なまれ此
人年生粥代の〜これを〜ゆ今日是を
まりきはるさりひのゆ〜ひ此この祝いつま
代ゆ〜ひも雖宮大〜わ〜海養蘆
のゆ〜ひ〜粥を四方よそ〜色事もう法
事殺るもう〜ゆ粥を寛平乃時ち
年乃よ是代奉ゆ〜ひ三月三日年とれ
御宴代ゆ山御ゆ〜ひ同宴代ゆ〜ひ新七種

御新。雜令云凡進新之日辨官及式部兵部宮內省共檢校貯納主殿寮。

○江次第　五年中所用御新諸司並五畿內國司供進見主殿寮式。

其數ナヽ延喜式見ヘタリ。

延喜式第三十六主殿寮式年中所用御新湯殿料一百八十荷御匣殿御洗料七十二荷御沐料一百八十荷御脚次料二百四十荷御炊料七百八荷儲料二百荷中宮準此御贄殿五荷

已上六百也。延喜式中宮職式正月十六日踏歌妓女四十六人祿料細也綿六百也預請大藏省饗宴班賜有差

光源氏物語一。末摘花コトニヲトコタウカアルカヤウハ初音コトニハヲトコタウカヤリ

正月十五日一。江次第云正月十六日被行由事起無所見今案正月十五六日月明時京中士女踏歌云云見朝野僉載二十一。

法弼ハ白髮大臣小臣あそらかぎりなくもとゝ九源宰相法師記ヨミヲ

廿七　御新　四月

ミカヒキ

見ハ百官忠新奉ル文用者小おほ光源氏ハ延喜式ヲ

ヲトコタウカヤリ延喜式ヲ

天武天皇四年正月十四日百寮諸人新

奉ル事ヲ御新ト書ル見ル

ヒ

廿八　踏哥　長倉　十六日

踏哥ハいつの日乃男踏哥の事ハ

てハ給ヒ所ヲ所ヲ給ハ女踏哥なり

それハ十六日なり光源氏ハ知給なくに

を行給ハなくて踏哥乃事をヨ給ハ

ハ天ハ月十六日乃ハなれハ京

中乃男女ハ給ハ知給ハ

給ハ年ハ祝詞ハ給ハ

朝野僉載第二十一載踏歌女踏歌章典

給ハ給ハ給ハ給ハ踏哥ハ

ハ給ハ天武天皇三年正月ハ天極殿

ハ清御ハ男女ハ乃事なく

踏哥乃事ハ見ハ給ハ

○日本紀安康天皇紀農播磨摩能私記曰師説烏羽之實也其色黑人喩之或説鵜羽也或説髮之異名也或説夜之異名也言只欲讀黑之發語也

天平比 ○天平二年事也續日本紀ニアリ

長常 長サ五尺二寸キメ長常八丈六尺也

ヌラヒ御持 天平十四年事也續日本紀ニアリ

あくまでも ○古今和歌集巻第二十なりなりひろく新しき年始ふくしこそ千年ぬるまくたのしきとつあ

日本紀ニ代々まりつよろつの代まてを

範兼童蒙抄ニ此日本紀續日本紀也

一説ニ下年とりてあれきとつ光と云代々うされ〳〵續日本紀説たしうなれは猶正説くいはへ

三年キ五年ノ丑 ○内辨宣大夫遠名少納言稱詫出ル

御門踏哥ハ六位以下乃人〳〵琴を引くらくひくいとくあるくしき年法始小如此コリト也

小延暦十四年乃正月は神代紀ハ天孫降代ハ

為ハ天孫降代ハ

踏哥ハ天孫降臨ハ

踏哥ハ今更記ニ及ス日踏哥とは小節とは白馬節といふ節とは小節とは

海ハ人〳〵ハ

常と内辨ハ作ル者ハ作ル者ハ

ならくは大夫達とは大夫達とは

アコハシリ。日本紀私記云今俗曰阿良礼走師説此歌曲之終必重稱萬年阿良礼今故云萬歳樂是古語之遺也

建禮門。○拾芥云於建禮門被行之時不開件門依裝束也

清寧天皇。○日本紀十五清寧天皇四年九月丙子朔天皇御射殿詔百寮及海表使者射賜物各有差

○日本紀孝德天皇九年春正月辛巳詔士大夫等大射官門内

射礼

十七日

見江次第

乞い建礼門にて行はる事なり代々如し豐樂院にてあり十六日小兒部省の法番

江次第云正月爲御忌月時三月行之天慶長和永承延久

ぶとい事あるべし射手のへさきにもる儀式なり正月小なれば三月にも行

清寧二十三代

はる三月なるべし月次十三日なるべし清寧天皇四年の月一日小兒部省の

士小詔ありて宮門内小大射をしてあり色

也人位已上にはれ物とも用ひらるべしかりそめふかく祝ひくい云伝ひいはゆる言葉

てをめ物といふ也古いふ也大小乃芸をわ

ひ事いかほどの儀ぞ用ひ奉てなり踏哥節

會といあくまきてつまりて法あり

ふ或いあくまを御つまり宣命ぬ講ふ

本朝書籍目録雜〻部宣命譜一卷

ふ物此儀竹川をうしろ高巾子御冠自房給之詳見

玉鬘巻河海抄同巻カサシノワタノ抄踏歌人以綿造華著冠額也是号高巾子云云

舞ひ法ふ事男踏哥法事なるべし今代

代ふ行はる十六日法女踏哥うたう

[illegible]射礼乃ちはめなしあるべきの仁徳を宣
乃御宇ふる森國ちらく孫ふ世稱ふ乃
ふ乃的をしくしくもりふ摩臣百官をめ
く此稱的式射さしるふ更ふ射式
を人なるうちふ有人宿禰人みの人
的臣祖
ひりてふ的を射しるしい海人宿禰お
そをとりしてあ門りなひきをしひ
奉りをしとあ又射礼のあく射射
とくあをそ射礼射ふ示をさる四府
よをふいさしあるふ射乃ふしは

○裏書云賭弓大蔵省進射遣菓物佐度布是以弦弓場殿令四府射之

[四府] 左右近衛 左右兵衛

[禮記] ○禮記月令仲春之月帶以弓韣授以弓矢于高禖之前

[近衛院年号] [罰酒] ○裏書云康治二年宮治左府欲行罰酒以久絶故不行云云

[illegible]弘仁二年[illegible]月ふ[illegible]事ふ[illegible]

三十 賭弓

十八日 立次第二[illegible]射禮後朝饗行

[illegible]い天子弓場殿ふのそそそ弓を沙汰をふ
なり仲春ふ弓式を沙事ふ移記ふくくも
行ふ明を津き的ごりけくた右の左儒
左右兵衛四府乃舎人ともの射行ふ左右
乃大将射を式奏ふ沙勝乃方いまけた
ふ小罰酒をたこなふ文勝た方ふ雅楽式奏
をたくを房乃管弦をあきい事をそ
後大将射を小饗をくふ式ふりあくを

大將左右ナク參内ス事

○上次第云左右大將申障以隨身就職人所令申依不設饗也當日有撰内竪仍參入若大臣大將者可遣出納

○裏書云大將必申障故實也依不備饗食故再三召之後參仕也

寛空○元亨釋書十寛空姓文室氏内州人事神日爲弟子又稟寛平上皇密灌兼得圓堂院事天曆帝勅修祈雨法過期不雨君臣潛笑空乃著法服捧香爐入宮庭立焚香誦咒密觀須臾于時陰雲忽起大雨暴降然宮城而已不到他所時人奇之康保元年爲僧正天禄三年二月六日化年八十九

文人○花宴河海抄云文人公詩作人也呉音ニモナスハセリ是名目也ウツホ物語アキアヂノ下云文人ト題給テフミタテマツル

保元三○平治元年正月廿一日被行内宴

公事根源上

三十一

仁壽殿觀音供　四日

東寺孔長者ハ云人ハ此事ヲ勤ル也

堂内乃時ハ真言院ニテ行ル也ニ月

或記云白檀正觀音一體高七寸見長暦四年十月十九日注進仁海僧正數六月十八日觀音供ハ仁壽殿ニ安置ス像一體仁壽殿ニ安置ス

仁和寺

觀音供ハ也

仁寛空僧正ヲシテ内部法養ヲ行ル也海

法事ヲシテ玉子乃御祈乃爲ナリ蓄ハ又釈

居ハ僧ヲシテ二間ハ加持

禁秘抄云二間敷疊一帖北間向妻戸敷

枕詞舊譯護念

ヲシテ

阿闍黎座半疊一南間如御讃之時懸本尊寄障子也

三十二

内宴　次一日

内宴ヲ行ハル

ルヲ文人ヲモ影供ヲ詩ヲ

作ル座ニ御おとゝ藤ヲ次一日ハ

二日廿二日乃經子讃日ハ

二ヲ二ヲ一二軸乃法華經ヲ云御ヲ

乃ハ供ヲ保元ハ法西ヲ行ハ

國忌。江次第云東寺儀但雖西寺國忌於東寺行之依西寺荒也

天子七廟。禮記王制云天子七廟三昭三穆與大祖之廟而七大全米云曰蓋太祖之廟始封之君居之昭之北廟二世之君居之穆之北廟三世之君居之昭之南廟四世之君居之穆之南廟五世之君居之廟皆南向各有門堂室寢而牆宇四周爲太祖之廟百世不遷自餘四廟則六世之後每一易世而一遷其遷之也新主祔于其班之南廟南廟之主遷於北廟親盡則遷其主于大廟之西夾室而謂之祧凡廟主在本廟之室中皆東向及其祫于太廟之室中則唯太廟東向自如而爲最尊之位羣昭之入乎此者皆列於北牖下而南向羣穆之入乎此者皆列於南牖下而北向南向者取其向明故謂之昭北向者取其深遠故謂之穆蓋群廟之列則左爲昭而右爲穆祫祭之位則北爲昭而南爲穆也又云毀廟云者何也曰春秋傳曰壞廟之道易稽可也說者以爲將納新主示有所加耳非盡徹而悉去之也

昭祧穆祧。祧玉篇他

三十三

國忌

廿八日

長慶院乃母后女御茨子乃御忌日也天仁堀河院女御也

元子小一条院冒乃御國忌を捨くこれ女

[村上天皇母后御國忌前見タリ]

日忌國忌とも[illegible]異和ともに天子七

祭法云王立七廟一壇一墠曰考廟曰顯考廟曰祖考廟曰皇考廟曰[illegible]月祭之遠之廟爲祧有二

廟乃内大祖し昭穆祧穆祧しく祧のぞきてく

排享嘗乃止去祧一爲壇去壇爲墠墠爲墠無祭之無嘗乃止去墠曰鬼

真和乃四廟とい時ふきてうしく殿廟として

[illegible]乃捨る事れ侍もそれ御佛事へ

東寺とて行ひ[illegible]事なし大

[illegible]御國忌なしとれ日い御門御わ

そひなとをとて[illegible]ふ給きされい祇記よ

忌日小は樂をいへり我乃律乃ふ

を國忌れ日樂沈る次右い杖八十とあり國

忌をとを小音樂をなとともかう罪科ふ

こ[illegible]をいしや又廢乃廢勢といふ事を

廢勢い法司政沈せとしいり是い一日沈か

ゆりて天下法司乃政とをしめ御是教日

小及ひく[illegible]乃政を[illegible]をうまくいふへ

うさうを小一日沈かきりて廢勢日とは

[illegible]今一法女乃日社御國忌と廢勢りて

公切遠廟也

サンタルヲナシ 昔國忌天智天皇崇福寺桓武天皇西寺仁明天皇東寺三行ハル時ハ凡國忌日各請當寺僧一百口轉經禮佛治訖玄蕃ノ官人詣寺布施物アリ 忌日樂芸

○禮記祭義註忌日親之死日也

○又檀弓 上忌日不樂

○笞杖 孝德天皇紀

廢朝廢務 禁秘抄云廢朝者諸司政如恒天子不臨朝政廢務者諸司不政一日或三日○又云世大事大臣奏時有之依事淺深或五箇日或三箇日也廢朝二日被御メレハ止音奏警蹕禁中

無物音垂清涼殿御簾第四日可上御簾而當惡日或無沙汰及數日

○古事記中卷即舉火見者既崩訖尒驚懼而坐殯宮更取國之大奴佐種種求生剥逆剥阿離溝埋屎戸上通婚馬婚牛婚鷄婚犬婚之罪類爲國之大祓

外記政始 後醍醐年中行事九日十九日此比日ヲ撰テアリ

三十四 神祇官献御贖物 皆日

天皇ハ豊浦法官小ハリ[長門ニアリ]まれ時ハ[ヒ]ぬ[ル]ときハ御あの地を借むとてみくらの又日事奉

紀ハ天富命[トミノミコト]麻をうへ御ぬさ作法

舊事本紀七神武天皇紀天富命更求沃壤分殖好麻木綿永奉

て奉ら[ル]ものの又毎日乃御あの地

麻大嘗會繼[ケ]ぬ後朱雀院乃御時ハ[ヒ]ぬ[ル]時ハ[ヒ]ぬ[ル]

六十九代

三十五 外記政始 江次第十八

匡房卿記ハ乃[ノ]ごとなり

毛[ケ]ぬ吉日を[ヒ]えらびくなこなしえんの日なれ

ばき也上御[ム]簾ハ[ヒ]ぬ[ル]ハ[ヒ]ぬ[ル]ハ[ヒ]ぬ[ル]

ぬ宰相廂[ヒサシ]ハ[ヒ]ぬ[ル]ハ[ヒ]ぬ[ル]ハ[ヒ]ぬ[ル]

ヤタナシ。結政所見江次第

○續後拾遺巻第十六
雜歌中

外記廳結政座ヨ古
宮ノ柱ノ今ヨ移ル
ヲ成ラルレ作
ルクヨメ

中原師光朝臣

いにしへのなりしの都の
大柱こゝろなしにも
なをぬらるる

南所名目抄云〜
在外記廳

出立園大曆延文三年
正月巻云於南所門外
得上官了次第四位立
樹南五位立樹北

紙云外記史ノ
御ノ車ヲ立テ
ヲ乃車ヲ
いくらとて出さ
そて参内し
俗ノ改ヲ
は先南ヲ
使ノ廳ノ